



日本学士院ニュースレター

2014. 10 No. 14



日本学士院会館竣工40年（竣工当時（左上）と現在（右下））

本院会館は、昭和49（1974）年5月に竣工し、現在に至ります。（関連記事8ページ）

目次

第104回日本学士院賞授賞式.....	2	講演会レポート.....	11
学士院の歩み.....	5	第9回日韓学術フォーラム.....	11
会員寄稿（広中平祐会員）.....	6	会員の近刊紹介.....	12
『学問の山なみ』から ―歴史をつくった会員― ...	7	第2部部長の選定.....	12
日本学士院会館竣工40年.....	8	森重文会員、国際数学連合総裁選出.....	12
会館施設の利用案内.....	9	山川民夫会員、国際賞受賞.....	12
寄附のご案内.....	9	会員逝去.....	12
学びのススメシリーズ講演会のお知らせ... 10		編集後記.....	12

第104回日本学士院賞授賞式

天皇皇后両陛下の行幸啓を仰ぎ、日本学士院は第104回授賞式を平成26年7月7日（月）に本院会館（東京・上野公園）で挙行いたしました。本年は、恩賜賞・日本学士院賞1件1名、日本学士院賞8件9名、日本学士院エジンバラ公賞1名、計10件11名の方々に授賞を行いました。



杉村 隆院長から賞状・賞牌を授与される赤崎 勇受賞者



受賞者と文部科学副大臣、日本学士院役員



授賞式で式辞を述べる杉村院長

恩賜賞・日本学士院賞

「高品質 GaN 系窒化物半導体単結晶の創製と p-n 接合青色発光デバイスの発明」

赤崎 勇（名城大学終身教授、名古屋大学特別教授・名誉教授、名城大学窒化物半導体基盤技術研究センター長、名古屋大学赤崎記念研究センター リサーチフェロー）

日本学士院賞

『戦前期日本の金融システム』

寺西 重郎（日本大学客員教授、一橋大学名誉教授）

「シアノバクテリア概日時計の再構成と計時機構の研究」

近藤 孝男（名古屋大学大学院理学研究科特任教授・名誉教授）

「幾何学的表現論と数理解析」

中島 啓（京都大学数理解析研究所教授）

「津波防災の総合的研究」

首藤 伸夫（東北大学名誉教授）

「らせん高分子の精密合成、構造、機能に関する研究」

岡本 佳男（名古屋大学特別招へい教授・名誉教授、中国ハルビン工程大学特聘教授）

「イネ科植物の鉄栄養に関わる分子機構の解明と育種への応用」（共同研究）

森 敏（東京大学名誉教授）

西澤 直子（石川県立大学生物資源工学研究所教授、東京大学名誉教授）

「生体肝移植の基礎研究および臨床開発と展開に関する研究」

田中 紘一（神戸国際フロンティアメディカルセンター理事長、京都大学名誉教授）

「生体の環境ストレス応答の分子機構の解明」

山本 雅之（東北大学大学院医学系研究科教授、同大学東北メディカル・メガバンク機構長）

日本学士院エジンバラ公賞

「微生物の分類学的研究と微生物系統保存事業に対する貢献」

駒形 和男（東京大学名誉教授）

＜受賞者寄稿＞

「戦前期日本の金融システムについて」

日本大学客員教授、一橋大学名誉教授 寺西 重郎

今回学士院賞をいただいた私の著書『戦前期日本の金融システム』（岩波書店）は、戦前期の金融システムを、銀行を中心とする間接金融の側面と市場を中心とする直接金融の側面の両面から総合的に把握することを意図したものである。この方面の研究は従来、銀行研究と資本市場研究という二つの領域に分割され、それぞれ別個の領域として研究されることが一般的であったから、私の方法はいくつかの新しい知見をもたらすこととなった。一つには戦前期の金融システムがその基層的性格として英米的な証券市場を多用する金融市場中心のシステムであったか、それとも戦後日本と同じ銀行が支配的地位を持った間接金融中心のシステムであったかという問題について、戦前期においては二つのシステムが互いに制度としての優劣を競うという関係ではなく、相互依存的な役割分担の関係にあったことを明らかにしたことである。

また戦前期日本の金融システムがその歴史的進化の形態として、自生的に戦後の間接金融の方向に向かっていったのか、それとも戦前のシステムでは資本市場ないし金融市場が確固とした活動領域を維持しており、それが財閥解体などの戦時から戦争直後にかけてのショックにより突然変異的に間接金融に切り替わったのか、という問題について、私の研究は前者の視点を強調する結論を得た。すなわち昭和恐慌などの戦間期の経済変動が、従来戦前期の金融市場の中心的なトレーダー（担い手）であった中間層である地主や商人層の没落をもたらしたため戦間期において既に間接金融システムへの動きが生じていた可能性があるということである。これについ

てはしかしながら、私の分析が捉えたのは上層の中間層のみであり、中間層全般はどうであったかをマイクロデータなどできっちり確かめる必要が残っていることが指摘されている。また最近話題のピケッティによる戦間期における世界的な中間層の没落、所得分配の不平等化という指摘との関連を検討するという作業が、新たな現代的意味をも持つ課題として浮上してきている。

さらに第一の戦前期以来の金融システムの基本的・基層的特質という問題についても、両替金融などの前近代的な江戸時代ないしそれ以前からの金融システムの発展をどう考えるかという問題が残っている。これに加えて、最近私が行った日本とイギリスの経済行動の宗教的基礎に関する研究（『経済行動と宗教』勁草書房）では、日本と英米では宗教「改革」の性質に起因して、経済的取引における「身近な他者」の扱いに関する基本的な違いがあるということが示唆されている。このことは金融システムの性質についても、英米的金融市場では「身近な他者」に関する意識が弱いため、アームズレングス（互いに距離を取った者同士）の取引慣行が支配的となり、日本ではその意識が強いため銀行と企業の関係依存的取引慣行が生じたという可能性を含意している。これは金融システムの文化的基礎ともいべきかなり本質的な新問題であり、前近代的金融の系譜に関連づけながら本格的な分析を行う必要がある。いずれにせよ、一応完成したつもりの研究の周辺に、次から次へと興味深い新しい問題が生じてきているというのが最近の実感である。研究の道は本当にどこまでも終わりのない、深いものであると今更ながら思っている。



天皇皇后両陛下に研究内容をご説明する寺西受賞者



授賞式後、来賓と談笑

＜受賞者寄稿＞

「微生物系統保存事業」

東京大学名誉教授 駒形 和男

人類は古くから酒を醸し、パンを作ってきたが、その担い手が微生物であることを知ったのは、わずか160年ほど前のことである。微生物は、顕微鏡の助けを借りなければ見ることでできない微小生物の総称で、細菌、放線菌、アーキア（古細菌ともいわれた）、糸状菌（かびの仲間）、酵母、担子菌（きのこの仲間）、微細藻類、原生動物などが含まれる。

酒の醸造は、バイオテクノロジーの原形であり、近年の生物学の進歩は、微生物を「生命のモデル」とした研究に負うところが多い。また、微生物は地球上の物質循環に関わり、地球環境の保全のうえで重要な役割を演じている。

微生物のなかには、他の生物から隔離して培養できるものがある。このように純粋に分離・培養したものを微生物の菌株（微生物株）という。菌株は微生物学の研究や微生物産業を支える基盤であり、医学分野の微生物株は医学の研究のみならず、ワクチンなどの製造に欠くことのできないものである。

今日まで研究室や研究施設で連綿と受け継がれてきた菌株は、過去の研究を追試・実証するための重要な「生き証人」であり、未知の機能が期待される資源である。しかし、教授の交替にともない、保存菌株が散逸した例は少なくない。残念なことである。

菌株は、「生きている」生き物であり、保存中に変異のないよう厳しい管理が必要である。菌株の保存には、主として凍結乾燥法と液体窒素気相での保存法が用いられる。また、菌株の由来、性状、関連する研究情報などの収集・管理も菌株保存のうえで必須である。

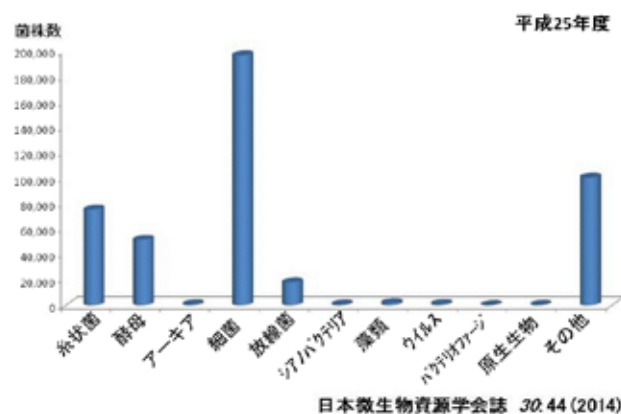
研究・産業に重要な菌株を収集、保存、分譲する事業を微生物系統保存事業といい、その機関を微生物系統保存施設という。通常、英語名 Culture Collection of Microorganisms からカルチャー・コレクションという。最近、カルチャー・コレクションは微生物株のみならず、

ゲノム DNA など扱うようになり、その職務が拡大している。

カルチャー・コレクション同士のネットワークとして、わが国には日本微生物資源学会があり、現在23の機関が加盟している。これらのカルチャー・コレクションは、約35万株の微生物株、約10万株のヒト関連クローンを保存し、約2万株の微生物株、約26万株の組換え体を国内・国外の研究者、企業に分譲している（平成25年度）。国際的には世界微生物株保存連盟があり、その傘下の世界微生物株情報センターによると、世界の70の国と地域に約650のカルチャー・コレクションがあり、約240万株が保存されている。

微生物株は人類共通の資源であり、健全な状態で次世代に渡さねばならない。現在、われわれが知っている微生物は、地球上に存在する微生物の1%とも5%ともいわれている。今後、微生物系統保存施設に新しい微生物株が寄託されるとともに、取り扱う資源の種類と数の増加が考えられる。微生物資源を保存・供給する微生物系統保存事業は国家的事業ともいえるものである。この事業にたいするますますの理解と援助が望まれる。

わが国の保存菌株の分類群と菌株数



研究資料展示の前で



来賓と懇談する駒形受賞者

学士院の歩み 第7回 学術研究費の補助

日本学士院は、明治6（1873）年に結成された近代的啓蒙学術団体である明六社を源流として明治12（1879）年に創設された東京学士会院を前身とします。東京学士会院は、明治39（1906）年に帝国学士院に改組し、昭和31年に現在の日本学士院となりました。

このコーナーでは、130年を超える本院の歴史についてシリーズで紹介します。

明治39（1906）年に帝国学士院が成立した後、緒方正規会員から会員の研究に対する補助の要請があり、続いて櫻井錠二会員から、「此学士院の事業の一つとして、研究の補助と云うことの規則と云うものを拵えては如何かと思っております。其の補助の方法は或は機械を学士院で買うて研究者に貸与するのも一つの方法であります。或は研究の材料に使う物を購入費用を補助するのも一つの方法であります。で色々方法がありましようから、そう云う方法を考えまして一つの規則を設けて、外国の例もあることでありますから、それを斟酌して其規則を設けて其規則の範囲内で今のようなことをやったら宜くはないかと思ひます云々」と発言があった。これらの発言を元に検討準備が進められ、明治40（1907）年、学術研究費補助に関する決議が行われ、研究費の補助申請を開始するに至った。

補助申請当初は、政府予算による経常費のみであり、会員自身の研究にも、その補助が十分でない経理状態であった。しかし、明治43（1910）年、皇室から賞典資（授賞資金）下賜の御沙汰があり、そのことが巷間に伝わると、民間から寄附が相次いだ。

明治44（1911）年には、第1回帝国学士院賞を受賞した高峰譲吉より、5千円寄附の申し出があり、院内で検討の結果、寄附金を元金とし、利殖金を一般学術研究費補助に充てることとした。大正元年（1912）年には住友吉左衛門、大正2（1913）年には古河虎之助より、それぞれ、向こう10カ年、年間1千円ずつ、合計1万円の寄附の申し出があった。

これらの寄附申し出に応ずるべき会計的措置として、明治44（1911）年、「帝国学士院学術奨励金特別会計法」が公布された。また大正4（1915）年には、同法律が廃止され、新たに「帝国学士院学術研究奨励金委任経理ニ関スル法律」が公布され、これによって、事業を推進するのが容易となった。大正5（1916）年には、「会員に非ざる者に対する学術研究費の補助は会員又は官公

私立大学の総長若しくは学長の推薦に依る」との決議を行い、会員外の研究者に対する研究費補助を行うこととなった。

これ以後も寄附は相次ぎ、やがて総額にして300万円に達するものとなった。昭和7（1932）年創設の日本学術振興会や、文部省の科学研究奨励費が自然科学に限られていた時代に、帝国学士院の学術研究費補助の果たした役割は極めて大きなものであった。

大正9（1920）年には皇室より「其院学術研究の資として壹万円下賜候事」との御沙汰を拝した。帝国学士院では委員会を設けて御下賜金の使途について協議した結果、その一部を帝室制度の歴史的研究を行うことと決定した。本事業は、のべ38名の研究者が参画し、昭和12（1937）年より『帝室制度史』計6冊が刊行された。

大正5（1916）年には、学術研究費補助に関連し、学術研究を補助するための財団から、然るべき研究を行っている研究者に対する研究費の補助を依頼された場合には、その推薦を行うべき旨を議決し、東照宮三百年祭記念会、有栖川宮記念学術奨励資金等に研究費補助の推薦を行った。

戦後、財閥解体等により寄附はほとんどが中止され、本事業も壊滅的な打撃を受けたが、現在に至るまで引き続き行われている。財団法人原田積善会からは、大正12（1923）年より100年間、毎年金1万円ずつを寄附されることとなり、現在まで唯一継続して（現在は毎年50万円）寄附が行われている。

補助研究事項件数、補助金総額

年次	件数	補助金 総額(円)	年次	件数	補助金 総額(円)
大正2	3	1,300	昭和6	69	41,470
〃 3	6	2,460	〃 7	71	42,965
〃 4	4	2,540	〃 8	92	55,850
〃 5	7	3,000	〃 9	79	50,630
〃 6	6	4,536	〃 10	81	44,635
〃 7	12	6,754	〃 11	90	44,160
〃 8	9	5,737	〃 12	82	43,100
〃 9	6	6,737	〃 13	82	43,730
〃 10	9	8,788	〃 14	85	45,940
〃 11	14	11,640	〃 15	84	45,530
〃 12	26	25,031	〃 16	67	48,930
〃 13	13	17,120	〃 17	71	56,370
〃 14	25	21,500	〃 18	71	62,170
〃 15	52	49,000	〃 19	59	40,350
昭和2	71	48,400	〃 20	39	45,000
〃 3	70	53,200	〃 21	59	47,300
〃 4	64	42,950	〃 22	51	40,200
〃 5	69	42,850			

(会員寄稿)

果報は不可思議なるか

広中平祐 会員
(数学専攻)

数学という学問にも時流もあり季節もある。季節の兆しを感知して種まきに献身する人もいる。そんな学者が必ずしも歴史の一ページを飾るほどの名声を頂くとはい限らない。私は豊かな実りを刈り取った一人で、幸運とは摩訶不思議なものと感心している。この歳になって半世紀以上前の京都大学での秋月康夫先生の種まきは偉大であったと思うようになった。私は京大の三年生に成って自分の性格に最適の学問は数学だと確信した。

気負いではなく、子供の頃少々自閉症的だった自分には最適だと思った。そして秋月先生のセミナーグループに入れてもらった。当時私の目から観て、京大数学教室の教職員数は限定的で教官人事も封建的に思えた。秋月先生だけは違って見えた。京大に代数幾何のグループを創りたいという燃えるような情熱を持っておられた。東京大学から井草準一（後に Johns Hopkins 大教授）を呼び代数曲線論の講義を、名古屋大学から永田雅宜（後に京大教授、学士院賞）を呼び代数学を中心とする代数幾何を、京大の中野茂男（後に数理解析研究所教授）には東大の小平邦彦先生（元学士院会員）による複素多様体の代数幾何を、また中井喜和（後に阪大教授）、松阪輝久（後に Brandeis 大教授）、松村英之（後に名古屋大学教授）、他大学の先生も招いて秋月スクールで代数幾何の多角的研究を推進していた。米田信夫（ホモロジー代数）からフランスのパリーでの新説などを聴講できた。秋月先生の招きで岡潔（多変数複素関数論）の講義を聴くのも屢々だった。岡潔先生は京大卒業後、高校の数学教師の職で最先端の数学研究を続ける苦難の時代があった。秋月先生は、第三高校の同窓だった谷口豊三郎（東洋紡績の重役）と協力して奇才奇人の名高い岡潔（後に文化勲章）の財政面でも支援を続け、奈良女子大の教授職を世話して岡潔先生を守り続けた。岡潔先生は研究業績では世界的に高い評価を受けていたが、京都大学に迎えたいという秋月先生の願望は実現できなかった。秋月先生は代数幾何のセミナーグループの連中に欧米での新理論の解説をさせ、完全に理解していないときには怒鳴りつけることも辞さない。それでもセミナーのメンバーは、秋月先生ご自身の勉強と理解力に感服していた。聞き流しで済ませる先生ではなかった。ただグループの中で最年少だった私に対しては何故か優しくすぎるくらい優しかった。私にはヨーロッパや米国からの新理論を読んで解説しろと命じることは一度もなく、先輩が批判されながら解説するのを聴いて見ただけで放任して下さった。私にはそのような教育方法を充てがっておられたのかも知れない。

私が大学院生になったときは Harvard 大学の Oscar Zariski 先生を京大に招待して下さりその講義を聴くことが出来た。Zariski 先生が、ある時突然、私に Harvard 大学の大学院に来て勉強してみないかと仰った。当時 1 ドルは 360 円、しかも円との交換は 30 ドルまでと制限されていた。当時私の手持ちは全部で

昭和 6 年、山口県生まれ。

京都大学理学部数学科卒業。ブランダイス大学准教授、コロンビア大学教授、ハーバード大学教授、京都大学数理解析研究所教授・所長、山口大学学長等を歴任。一般財団法人数理科学振興会代表理事。昭和 45 年、日本学士院賞、フィールズ賞を受賞。文化功労者、文化勲章、レジオン・ドヌール勲章（シュバリエ）受章。昭和 51 年より日本学士院会員、平成 26 年 6 月より日本学士院第 2 部部長。



1 万円くらい。海外留学など夢にも思っていなかった。Zariski 先生の説明も十分理解できないときは秋月グループの先輩たちが挙って通訳までして私を助けてくれた。秋月先生からの口添えか指令があったとしか思えない。Zariski 先生の説明は Fulbright に旅費を申請しなさい、Harvard 大学に着いてからの生活費は研究助手として支給するとのこと。私の返答は即座に yes だった。Fulbright に旅費を申請して見ると英会話のテストがあった。最初の質問は “What is your hobby?” だった。“hobby” などと言う単語は聞いた事がなかった。英文の数学論文は読んでいたし、英文の論文を 2 編書いたこともあった。英会話のテストも何とかなるだろうと考えたのが大失敗の元。“hobby” の一言で英会話テストは終了。完璧の落第だと思った。留学など出来なくてもと。私の兄は 2 人戦死、弟や妹が 7 人もいる田舎者に海外留学は不要、日本にいても一人前の数学者になる自信はあった。ところが不思議なことに Fulbright 委員会から条件付き合格との手紙が来た。条件は 3 週間、自分で米国人教師をみつけて英会話の指導を受け、それを証明する教師の書簡を提出すること。ここにも秋月先生の口添えがあったのではないかと。私はとにかく大喜びで今度は真面目に英会話の勉強をがんばった。これで Harvard 大学に留学でき、博士号も取得、Brandeis 大学に就職、初年度は年俸 7 千ドル、二年目は 7 千 5 百ドル。それでも結婚もでき、山口県の田舎に住む親には毎月欠かさず百ドルの仕送りを続けることができた。就職 2 年目の終わりに、運良く Zariski 先生の懸案だった特異点解消問題を解決できた。そのお陰で助教授を一年、ついで准教授を一年、さらに Columbia 大学から教授の offer があって給料もびっくりするほど高くなった。Columbia 大学教授を 4 年勤めた時に、Harvard 大学の恩師 Zariski 先生から電話があって、New York にやって来るから面会したいと。久しぶりの面会は嬉しかった。ところが先生に会ってみると、開口一番、Harvard 大学の教授に成ってくれとのお願いだった。驚いたが、わざわざ New York に来られなくてもと言って、即座に Yes。Zariski 先生に対して、それは二度目の即座の yes だった。Harvard 大学に転職して 2 年目に Fields 賞を頂き、続いて学生時代に一緒に勉強した David Mumford も Fields 賞。私などは足下にも及ばないくらいの大天才で先に Harvard 大学の教授に成っていた。MIT 教授になった Michael Artin も畏敬する英才で私や Mumford との 3 人組で競いながらも助け合って Zariski 先生のもとで勉強した。私たちは恩師 Zariski 先生の胸像を創ってもらって Harvard 大学の数学教室に寄贈した。Zariski 先生の胸像は現在でも数学教室の common room に飾られて若い学生達が議論し歓談する様子を見守っている。

『学問の山なみ』から 一歴史をつくった会員一

130年を超える学士院の歴史の中で、500名以上の会員が選ばれました。このコーナーでは、物故会員追悼の辞を集めた『学問の山なみ』から毎回2名を紹介します。

安達峰一郎 あだち みねいちろう

明治2（1869）年—昭和9（1934）年
大正14（1925）年 帝国学士院会員選定



山形の生まれ。明治17（1884）年に司法省法学校に入学し、明治25（1892）年に帝国大学法科大学（後の東京大学法学部）を卒業した。フランス語や国際法に卓越し、帝国大学在学中には、お雇い外国人パテルノストロの国際法の講義などの通訳を務めた。帝国大学を卒業した年に、明治法律学校（後の明治大学）と和仏法律学校（後の法政大学）の講師に就任。また、同時期に外務省に入省し、昭和5（1930）年末まで務めた。明治38（1905）年にはポーツマス講和会議の随員となり活躍した。会議後、日本に戻り東京商科大学（後の一橋大学）で3年間外交史を講義した。明治40（1907）年には法学博士の学位を得ている。

その後フランス大使館参事官、メキシコ駐在公使、ベルギー公使・大使、フランス大使等を歴任し、大正8

（1919）年にはパリ講和会議に参加している。大正10（1921）年から昭和4（1929）年まで、国際連盟総会の日本政府代表を務め、大正11（1922）年には、国際紛争調停手続研究委員会の議長となった。大正13（1924）年、第5回国際連盟総会における国際紛争の講和のためのジュネーブ議定書の採択において日本に不利な原案を修正することに貢献した。昭和4（1929）年には、国際連盟理事会の議長を務めている。トランシルバニアのマジャール人の問題に関わって以降ヨーロッパの少数民族の問題に積極的に関与するようになった。またハーグ対独賠償会議では、英仏の対立を平和的に調停することに成功した。

法学者として安達は、大正9（1920）年常設国際司法裁判所創設のための規程起草委員に任命され、大正14（1925）年には、帝国学士院会員に選ばれた。欧州滞在中は国際学士院連合の総会代表を務め、特に日本が提案した「在外未刊行日本関係史料」を収集する事業の進展に貢献した。また、国際法学会の準会員に選ばれた。昭和5（1930）年に彼はオランダ・ハーグの常設国際司法裁判所の判事に最高点で選ばれ、昭和6（1931）年以降裁判所長を務めたが、在任中に亡くなり、オランダ国葬が行われた。

田中耕太郎 たなか こうたろう

明治23（1890）年—昭和49（1974）年
昭和16（1941）年 帝国学士院会員選定



鹿児島県の生まれ。大正4（1915）年に東京帝国大学法科大学を卒業後、商法学の助教授、教授、法学部長を務めた。商法学者としては特に、経済人の営利的性格から出る集团的・反復的・無個性的などの点に商法の特色を見出す「商的色彩論」がよく知られている。法哲学にも深い関心を持ち、『法と宗教と社会生活』等、それに関する著書や論文も少なかった。さらに、世界的な法の現象に注目し、『世界法の理論』三巻を著した。序によれば、本書は「世界人類社会の基礎の上に、現存する法律秩序の体系を分析且つ総合し新に之を整序し、同時に現行の法律思想に関し若干の反省を試みる」ことを目的としている。本書により田中は、昭和9（1934）年度の朝日賞を受賞した。これらの業績により、昭和16（1941）年に、帝国学士

院会員に選ばれた。

大学教授として、大学の自治と自由のために戦ったことも特筆する必要がある。東京大学法学部長になった昭和12（1937）年は日中戦争の始まった年であり、軍国主義的傾向が強くなり、大学の自治と自由に対する圧迫が強くなってきたときであった。田中は、一方では、大学総長に助言し、激励し、他方では、教授会の総意を結集し、大学の自治と自由のために戦った。

昭和20（1945）年10月に文部省学校教育局長、昭和21（1946）年には文部大臣に任ぜられた。この時代にはGHQ指令による教職適格審査、教員の待遇改善、義務教育の六三制の採用などに関わった。昭和22（1947）年には参議院議員に当選し、教育基本法、学校教育法、文化財保護法を成立させた。昭和25（1950）年から昭和35（1960）年まで最高裁判所長官に任じられた。

また、昭和35（1960）年12月には、国際連合総会で、国際司法裁判所の裁判官に選任され、9年間、オランダのハーグで国際裁判に当たり、8つの事件等を担当し、質量共に相当な量に上る2つの個別意見、2つの反対意見を残した。

日本学士院会館竣工40年

日本学士院会館は、昭和49（1974）年5月に竣工し、平成26（2014）年に竣工40年を迎えました。これを記念して、建築学専攻の内田祥哉会員に寄稿いただきました。

「日本学士院会館について」 日本学士院会員 内田 祥 哉

本会館は1974年の竣工で、今年創建40年を迎えた。設計は芸術院会員谷口吉郎。戦前から多くの作品を残した建築作家で、戦後、未だ木造建築しか造れない時代に、藤村記念堂（1947）や、慶応大学第二研究室万来舎（1951）等、詩情のあふれた作品で、当時の建築界の注目をあつめた。その後鉄筋コンクリート造の建築が出来るようになってからは、極めて多作で、千鳥ヶ淵戦没者墓苑（1959）ホテルオークラ：ロビー（1962）丸の内地区では帝国劇場（1966）の他、上野の山にも東京国立博物館東洋館（1968）があり、著名な作品は枚挙にいとまがない。

学士院の建物は、作者がすでに、多くの秀作を手がけた円熟期の作品で、一階ロビーの階段廻りには、作者ならではの香りが満ちあふれている。

当会館は40年を経て、殆どの設備機器類は寿命による取り替え時期を過ぎている。また竣工当時流行の先端であったアメリカ流の全館冷暖房方式は、日本の気候、習慣に合わないとして、今は個別に調節出来る方式が主流となっている。特に当会館は、各室各様の使い方をす

るので、全館方式は改修が進行している。

耐震については、建築基準法が1981年に改訂された。それ以後の物は、最近の巨大地震にも耐えていると言われている。しかし、この建物は、1981年以前に建てられているので、初歩的診断では、補強が必要な中に入れられる。しかし、専門家が見ると、壁も多く、その必要は無いことがわった。但し天井については、アンカー、釣り方など、疑問のあるところが、全面的に取り替えられた。

事務局の検索した学士院所蔵の資料によると、現在の建物は三代目である。初代は、日本学士院が「東京学士会院」と称していた時期に、現在とは異なる敷地に建てられていた（明治19年：1886）。それが手狭になって、上野公園が宮内省より下賜された時に、二代目の建物が現在の敷地に建てられた（大正15年：1926）。

しかし、それも再び手狭になり、南原繁日本学士院院長（ママ）の政・財界への働きかけの努力で、現建物の新築が実現した。高橋誠一郎芸術院長（日本学士院会員）の落成式の祝辞で、18ヶ月の工事期間中、南原院長の要請に応じて芸術院の建物が提供されていたことが述べられている。

南原院長は5月30日に行われる落成式について、挨拶の原稿を用意されていたが、落成を目前にして亡くなり、挨拶文は、和達清夫日本学士院長代行の代読であった。



東京学士会院・帝国学士院会館（明治19年竣工）



帝国学士院・旧日本学士院会館（大正15年竣工）



日本学士院会館（昭和49年竣工）



現会館建設の地鎮祭において挨拶する南原 繁院長（当時）。南原院長の左は坪井誠太郎幹事、右は設計者の谷口吉郎博士（日本芸術院会員、文化勲章受章者）。



建設中の現会館



新会館で初めて行われた授賞式（昭和 49 年）



昭和 49 年授賞式での記念写真（玄関にて）



総会議場



玄関ロビー

会館施設の利用案内

建築家谷口吉郎氏の設計による現在の日本学士院会館は、日本を代表する碩学の府にふさわしい荘厳かつ気品と機能性を備えた建物となっています。館内には、議場のほか大小 6 つの会議室等があります。

本施設をご利用になりたい方は、庶務係までお問い合わせください。

寄附のご案内

民間企業、団体、個人等から広く寄附金を受け入れ、学術の振興に資する事業を実施しています。金額の多少にかかわらず趣旨に賛同される方々からのお申し出をお待ちしています。（寄附受入は予算計上後、翌年度となります。）

なお、本院への寄附金は国に対する寄附金として、寄附者が個人の場合は、所得より「寄附金控除」の適用を受け、法人の場合は「寄附金損金算入」の特例が適用されます（関係法令：所得税法第 37 条第 3 項第 1 号）。詳細については、会計係までお問い合わせください。

平成 26 年度寄附者名
英国・エジンバラ公
一般財団法人原田積善会

学びのスズメシリーズ講演会のお知らせ

本講演会は、様々な分野で素晴らしい研究を重ねてきた日本学士院会員が、日本の将来の担い手となる子どもたちに知ることのおもしろさ、学ぶことの楽しさを知ってもらう一助になればという思いから企画されました。

地球の中を覗き込む ―地震波でプレートの行方を追跡する―

日本学士院会員、海洋研究開発機構特任上席研究員、東京大学名誉教授

深 尾 良 夫



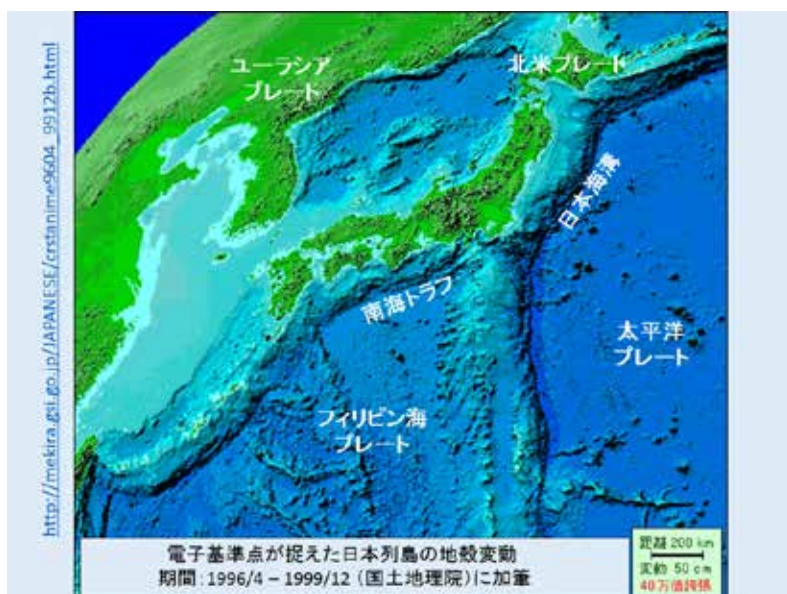
《開催日時・場所》

平成26年12月13日（土） 午後2時～

日本学士院会館

《対象》

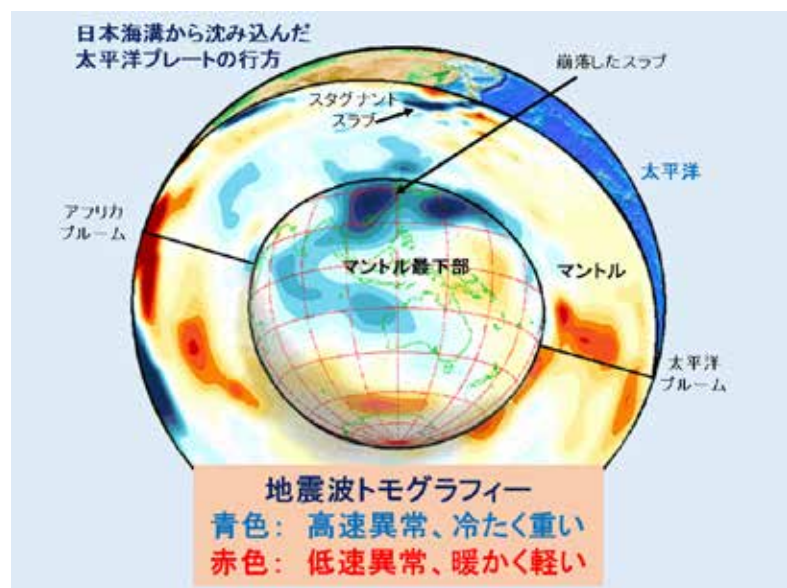
中学生・高校生・一般



上側の図は日本列島周辺のプレートの配置図です。日本海溝を境目として太平洋プレートが北米プレートの下に沈み込んでいます。2011年の東北沖巨大地震は、こうした沈み込みがときに劇的に起こることを示しました。しかし、沈み込んで地表からは姿を消したプレートはどこへ行くのでしょうか？プレート運動が繰り返られる地表付近の世界と、より深部の世界とはどのように繋がっているのでしょうか？こうした疑問に答えるために地震波を使って地球の中を覗いてみましょう。次に下側の図は地震波トモグラフィーと呼ばれる技術を使って得られた日本列島を横切る地球断面です。皆さんも、上側と下側の図とを見比べて日本海溝から沈み込んだ太平洋プレートの行方を想像してみてください。

《申込方法等》

入場無料 定員150名、先着順。
日本学士院ホームページから、またはe-mail、FAX、往復ハガキに「学びのスズメ聴講希望」と明記の上、住所・聴講者氏名（フリガナ）・電話番号・メールアドレス・中学生／高校生／一般の別を記載してお申し込みください。



講演会レポート

5月24日(土)に山梨大学、山梨科学アカデミーとの共催並びに山梨県教育委員会、山梨学院大学及び山梨日日新聞社、山梨放送の後援により、第60回公開講演会を山梨県立図書館(甲府市)において開催しました。今回は、鈴木興太郎会員(早稲田大学名誉フェロー、一橋大学名誉教授)が「それでも制度は変わる: 経済制度の設計と選択」、黒岩常祥会員(立教大学理学部特定課題研究員、東京大学名誉教授)が「20億年前に誕生した細胞からあなたまで、そして未来へ—宇宙誕生は望遠鏡で細胞誕生は顕微鏡で解く—」と題して講演を行いました。

グラフ・図絵・映像を使った分かりやすい説明に、聴講者は熱心に聞き入り、講演終了後は活発な質疑応答がなされ、最後は盛大な拍手とともに閉会しました。



講演する鈴木興太郎会員



講演を行う黒岩常祥会員

第9回日韓学術フォーラム

大韓民国学術院との共同事業として始まった日韓学術フォーラムは、本年第9回を迎え、平成26年9月30日(火)~10月2日(木)の3日間、東京で開催されました。フォーラムには大韓民国学術院から権肅一会长を始め12名の会員が来日し、本院会員及び報告に関わる分野の研究者等を合わせて約70名の参加がありました。

大韓民国学術院会員等は来日後、まず東京大学濱田純一総長を表敬し、その後、東京国立博物館を訪問し、特別展「東アジアの華 陶磁名品展」等を見学しました。夕刻には学士院を訪問、学士院役員等と和やかに歓談し、旧交を温めました。

翌10月1日(水)には、学士会館(神田)を会場として、4名の会員から次のように報告があり、日韓両国学士院会員等の間で意見交換が行われました。

報告1: 東野治之会員(日本学士院会員、日本史)

「木簡から見た日本古代史」

報告2: 崔秉鉉(CHOI, Byung Hyun) 会員(大韓民国学術院委員、考古学)

「韓半島中部地方における三国時代古墳文化の様相—支配国家交替後の再使用石室墳と連続造営古墳群—」

報告3: 喜田 宏会員(日本学士院会員、獣医微生物学)

「鳥インフルエンザとパンデミックインフルエンザ対策」

報告4: 李榮純(LEE, Yong Soon) 会員(大韓民国学術院会員、獣医学)

「韓国における鳥インフルエンザの発生と防疫政策」
最終日の10月2日(木)には、江戸東京博物館を訪問し、江戸東京の都市と文化の様子について説明を受けました。



フォーラム参加者の記念撮影



報告を行う崔秉鉉大韓民国学術院会員

会員の近刊紹介

- ・ 荳阪直行（編）『自己を知る脳・他者を理解する脳—神経認知心理学からみた心の理論の新展開—社会脳シリーズ6』新曜社、2014年7月
- ・ 三谷太一郎『人は時代といかに向き合うか』東京大学出版会、2014年6月
- ・ 菅野和夫（他）『詳説 労働契約法 第2版』弘文堂、2014年5月
- ・ 鈴木興太郎『厚生と権利の狭間（シリーズ「自伝」my life my world）』ミネルヴァ書房、2014年7月
- ・ 小柴昌俊『ニュートリノと私』PHP 研究所、2014年7月
- ・ 益川敏英『ノーベル物理学者が教える「自分力」の磨き方』ブックマン社、2014年9月
- ・ 佐藤勝彦『大人も子どもも夢中になる はじめての宇宙の話』かんき出版、2014年6月
- ・ 佐藤勝彦『親子で楽しむ アインシュタインとタイムトラベルの世界』幻冬舎エデュケーション、2014年8月
- ・ 内田祥哉+内田祥哉の本をつくる会『建築家の多様—内田祥哉 研究とデザインと』建築家会館、2014年7月

第2部部長の選定

古在由秀第2部部長の任期満了に伴い平成26年6月12日、選挙を行った結果、広中平祐会員が新たに選定されました。

森 重文会員、国際数学連合総裁に選出

第4分科の森 重文会員が2014年8月10日～11日に韓国慶州で開催された第17回国際数学連合(IMU)総会において次期総裁に選出されました。アジアから総裁が選出されるのは初めてです。

山川民夫会員、シアロ糖鎖科学永年研究功労賞受賞

第7分科の山川民夫会員が平成26年9月に開催されたSialoglycoconference（国際シアロ糖鎖科学カンフェレンス）においてLifetime achievements in Sialoglycoscience（シアロ糖鎖科学永年研究功労賞）を受賞しました。

会員の逝去

平成26年4月以降、次の方が逝去されました。

宇澤弘文 会員 （第3分科）

平成26年9月18日 享年86歳

編集後記

今回のニュースレターでは、第104回日本学士院賞授賞式のほか、公開講演会や日韓学術フォーラムの様子などについてお伝えしています。ご寄稿いただきました先生方や会員の皆様には心より御礼申し上げます。

さて、JR上野駅不忍口前（上野公園側）の建物がここ数年で建て替わっていますが、その様子を少し紹介させていただきます。位置的には西郷隆盛像がある広場の下あたりですが、建て替え前は、商店、レストラン、映画館、基会所などが入った建物で、昭和の面影を残す一画でした。本院より遠い方から「西郷会館（上野百貨店）」、「上野大東ビル（上野松竹デパート）」、「上野東宝ビル」という建物でしたが、リニューアル後は「UENO 3153」、「上野の森さくらテラス」、「上野バンブーガーデン」とモダンな感じに大きく様変わりしています。まだご存じでなければ、次に上野にお越しの際には、不忍口を利用されてみたらいかがでしょうか。

また、昨年末に文化庁に上野「文化の杜」新構想推進会議が設立され、2020年の東京オリンピック・パラリンピックを契機に、上野公園周辺の文化教育・学術機関が相互に連携・協力し「文化の杜」として国際的なシンボルとなることを目指し、ハード・ソフト面の整備方策等について検討が進められています。本院も同会議の構成メンバーですが、文化等施設のほかに行政機関や民間企業等もメンバーになっています。検討中の構想には、JR上野駅公園口の移設など、上野駅周辺の更なる整備案もあがっています。本年度中にはアクションプラン（最終報告）が出される予定ですので、こちらも注目いただければと思います。（H）

◎お問合せ先

日本学士院

〒110-0007 東京都台東区上野公園 7-32

電話：(03)3822-2101

FAX：(03)3822-2105

E-mail：jimu@japan-acad.go.jp

第14号：発行日：平成26年10月24日

（年2回 4月、10月発行）

ホームページもご覧ください。

<http://www.japan-acad.go.jp/>